

市場プロセスと企業家精神

ーイスラエル・M・カーズナーの経済学ー

Market Process and Entrepreneurship

原 谷 直 樹
Naoki Haraya

1 序 論

本稿の目的は、イスラエル・M・カーズナー (Israel M. Kirzner, 1930-) の経済理論について、市場プロセス論と企業家精神の理論に着目して、その特質を明らかにすることである。まず、均衡理論との対比、およびミーゼス、ハイエクとの継承関係という観点から、カーズナーの市場プロセス論について検討する。次に、市場プロセスにおいて経済活動を行う行為者のモデルについて、ロビンズとミーゼスの議論との関連性を踏まえて整理を試みる。最後に、カーズナーの理論において経済活動の中心を担う、企業家精神という概念について検討を行い、カーズナーの経済理論の全体像とその基本構造を示す。

2 市場プロセス

カーズナーの経済思想の第1の特徴は、その市場観の根底に市場プロセスというモデルを置いたことにある。これはいわゆる新古典派の均衡論に対する批判であり、実際にカーズナーは、新古典派の経済理論を含む、すべての経済分析の均衡論的方法を否定している。なぜなら、主流派の均衡論的方法による価格理論は市場メカニズムの本質を十分に捉えることができないからである。新古典派の経済理論では、経済のシステムが市場のメカニズムを通じて均衡に向かうことが前提とされている。また、均衡点が1点だけ存在するということが、市場がメカニズムとして上手く作動するという事と同義であると思なされてきた。その結果として、新古典派経済理論による市場メカニズムの説明の方法は、均衡状態の分析に集中しているとカーズナーは批判する。嗜好、技術、資源賦存量などの基礎的なデータを与えられたものとしたとき、各経済主体が極大化行動に基づいて描いた個々の活動の計画の中で、すべての取引が整合的に実現できるような計画の組み合わせが1つだけ存在する。その状態が均衡であり、市場が目指すゴールであるとされる。市場の理論は価格変数と数量変数の値を確定する、このような一義的な活動パターンの決定を説明するものと均衡論においては考えられているのである。

また、人びとの相互の計画を媒介するのは市場価格であると考えられるが、市場における完全情報の前提によって、相互の計画はすべてお互いに事前に了解可能なものになるので、均衡点の達成は単なる計算の問題にすぎなくなる。均衡価格や均衡取引量も、各経済主体の計画とともに、すべての関連する情報が所与となった段階で、同義反復的に決定される。このようにして、新古典派の価格理論では価格変数と数量変数の値、とりわけ均衡条件と一致する値の組み合わせに注意が集中される。したがって、ある市場を評価する際に問題とされるのは、均衡状態における価格、コスト、生産量といった値と、現